

佛教大学

仙教文化研究所報

創刊号

昭和59年3月31日

発行

目次

| | | | |
|---------------------------|---------|------------------|----------|
| ・研究所・所報の創刊によせて | 坪井 俊映…1 | 世第一法説の一考察 | 榎田 善夫…7 |
| ・研究助手報告 | | 観徹と浄土曼荼羅 | 松永 知海…9 |
| 成実論 覚え書き | 神谷 静治…2 | 補陀洛の一考察 | 妹尾 匡海…11 |
| 『牟子理惑論』編纂年代攷 | 稲岡 誓純…3 | 中論の研究 | 前川 重綱…13 |
| Saccarantlepa (rūpaññāga) | | 高麗時代の道教と仏教(上) | 梁 銀容…16 |
| の認識論の解明について | 勝木 太一…5 | 事業報告 | |
| 発智・大毘婆沙論における | | 編集後記にかえて | |
| | | Pali Udana 研究(1) | 本庄 良文…24 |

研究所・所報の創刊によせて

——仏教が説く三恵を思う——

佛教大学 所長 坪井 俊映

仏教が説く三恵とは聞恵、思恵、修恵の三であって、仏教の根本道理を学び、知り極める智慧が浅より深へと進む過程を三に分けたものであります。辞書の説明によると第一の聞恵とは教法を聞いて領解する智慧であって、修学にあたって得るところの初歩的な智慧ということができます。

第二の思恵とは聞法によって知り得たところの智慧を、さらに自から思惟し組織付けることによって得られる智慧のことで、いわゆるよく考えた智慧のことと思います。

第三の修恵は聞恵、思恵によって得た智慧によって、実際に実修実践して体得する智慧であって、いわゆる体験による智慧と考えます。

この三恵の中で、修恵が最高の智慧といって、仏教ではこれを重視します。

このことは、但なる聞法による生半可な知識や机上の空論に止まることなく、実際に自から実修する体験というキャリアーによる智慧を重んずることと思います。聞恵は聞いて(書物を読んで)知っただけの浅薄な智慧であり、思恵は聞いた、或は読んだ内容をよく考えて得られた智慧で、聞恵より一段と深く広い智慧と思われまます。修恵は聞恵、思恵の体験による発展、拡大、深化した智慧をいうと考えます。これには相当な時間を必要とするために、絶えざる努力(研究と実修)が要請されます。この智慧をそのまま知識という語に転用してもよいと考えます。

大学が教授・助教授・講師という職階制をとり、教授職を重んずることは永い研究と実践によるキャリアーを重視するためと思います。大学教員は高校の教員と異なり、但に学生に専門の高等教育をほどこすだけでなく、研究者であって、自己自身が専攻

する分野に対して不断の研鑽が求められるものであって、この研究重視、キャリアー重視の考えが職階制を設けたものと思います。この考えは、仏教が三恵を説き修恵を最高の智慧とすることとを考えを一にしています。

修恵は一朝一夕にできあがるものでなく、長年の聞思二恵の積み重ねによって形成されるものですから、絶えざる研究研鑽が必要であります。学問研究も同様であります。永い不断の研究(聞思二恵)がすぐれた研究成果を生み出すものと考えます。生み出された研究成果は譬えば大海に浮ぶ氷山のごときものと思います。氷山はその三分の二以上のものが水面下にあり、海上に浮ぶものは三分の一ほどのものですから、浮んでいるものだけが氷山の全てと思っては大きな誤りを犯すことになります。

学問研究も同様であって、発表された成果は一部であって、その基には深い聞思修の三恵のあることに気付かねばなりません。学問研究は海水に没している氷山を大きくすることではないでしょうか。これが大きくなるに従って、海上に浮ぶ氷塊も次第に大きくなってきます。これには不断の努力が必要であります。

仏教が修恵を重視するように、研究者もこの考えが必要であらうと思います。

本学の仏教文化研究所は、いうまでもなく東洋全域に伝播した仏教の諸現象を研究对象として研究する研究機関であると共に、斯学の研究に志す研究者の養成機関であり、さらに世界各国の研究者と研究交流を盛んにして、世界的視野に立つて仏教研究を進めんとするものであります。

本研究所以設置されてより既に十余年の歳月を持っています。その間、本研究所属の研究者はすぐれた研究成果を諸方面の学会誌に発表されているばかりでなく、研究所自体においても別記のごとき事業を行ない、さらに韓国および台湾の仏教研究者と研究交流の仏教学術研究会をもち、さらに今後はインド、アメリカ等の国々の仏教研究者との研究交流をはからんとしています。この方面でも各位のご協力ご支援を得たく思っております。

このたび本研究所の所報が創刊されて、研究所の活動が詳細に報告されるにあたり、研究所所属の研究者各位は、仏教が説く聞思修の三恵の精神を体して、今後の精進を切に願う次第であります。